



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

コロナ禍によって浮上した「神祭りの原点」

―「神在月」の国、出雲にあつて思ふこと―

青砥誠一

旧暦の十月（今年十一月十五日

日から十二月十四日まで）は「神無月」であるが、出雲国では「神在月」となる。それは全国各地の神々が一年に一度、出雲国に集つて、出雲大社の御祭神である大国主大神が主宰される「神議」に臨むためである。

あまねく人々に良縁を結ぶ神々の会議「神議」は七日間続くといふ。昭和二十六年に島根県東部（出雲地方）の玉湯町（平成十七年に松江市と合併）玉造に生を享けた私は、国中の神様が出雲国に集まるといふことを耳にしながら育つた。毎年この時期になると、かつて東京での学生時代や京都での修業時代に故里の地を思った際、「神在月」のことを「誇らしい」といふか「有り難い」といふか不思議な気持ちで脳裡に浮べたことを思ひ出す。故里に戻つて四十年余りになるが、年々出雲国に生れた縁が掛けがへのないものだ

と思ふやうになつてゐる。

十一月二十四日（旧暦十月十日）の午後七時、出雲大社から西へ一キロの「稲佐の浜」で神々をお迎へする「神迎祭」が斎行される（この後、大社では「神在祭」「縁結大祭」などが執り行はれる）。十二月一日（旧暦十月十七日）午後四時からの「神等去出祭」は、「神議」を済ました神々が

出雲国を巡られるのをお見送りする祭りである。そして、十二月十日（旧暦十月二十六日）の「第二神等去出祭」を以て神々は出雲国を後にして各地にお戻りになる。

稲佐の浜での神迎へについて補足すると、浜にお着きなつた神々は御神使の龍蛇神に導かれて出雲大社に向ふ。例年であれば浜には神迎神事を拝観する多くの人が集まつてゐる。そして神々の後に付いて出雲大社までお供することになる。しかし、武漢発コロナ禍の感染拡大防止

のために、今年は拝観をご遠慮いただいて供奉も神職のみになるといふ。大勢の人々が集ふ「密集」を避けるための措置で、少し寂しい感じがするが、神事（祭り）の原点を改めて考へるいい機会ではないかとも思ふ。かつては稲佐の浜に集まることはなく、神迎への際は家に閉ぢ籠もつて畏んでお迎へしたものだつた。

神々は諸人が賑々しく楽しく振る舞ふことを嘉納されると思ふが、だからと言つて神々への祈祷の原点を見失つてはならない。近年、出雲に限らず、例へば厳肅であるべき祭祀の場でやたらにカメラを向けたがる者がある。慎むべき場では慎まなければならぬと思ふ。午後七時からの稲佐の浜での神迎へでも時たまフラッシュを焚く者があると聞く。

十月一日の靖國神社での「御神楽の儀」では、コロナ禍のために参列者招待を取りやめて、神職・仕女のみが奉仕したといふ。神戸の湊川神社では十一月二十三日の新嘗祭を神職のみで斎行するといふ。やはりコロナ禍のためである。横浜に住む友人の話では、町内の神社では御神輿の渡御や余興が中止となつて、町内会役員のみが参列して祭儀を行ったといふ。今年には国中の催しで人々が寄り集ふことを警戒せざるを得なくなつてゐる。神社にとつても真に異常なことになつてゐるが、神事だけ

は斎行されてゐる。コロナ禍によつて「神祭りの原点」が自づから浮上した感じである。

ところで、私が父の後を継いだ玉造温泉の旅館「紺家」は私で九代目となる。徳島高等工業学校（徳島大学工学部の前身）に進んだ父は、繰り上げ卒業で昭和十七年十月、海軍に入隊。佐世保二二七設営隊長としてトラック島に渡り最後は海軍技術大尉で終戦を迎へてゐる。戦後は家業の傍らで町会議員や消防団長等々を務めて、元海軍軍人の親睦団体である「島根錙会」にも副会長として長く関与した。この会の会長が終戦時に海軍中尉であられた出雲大社教第五代管長の千家達彦様であつた。かうした父とのお縁から父亡き後、私は何かとお目に掛けて頂いた。五年前に帰幽されたが、励ましのお手紙を頂戴したこともあつた（出雲大社教とは大国主大神の「顕幽一如」のお教へを広める教団で出雲大社とは一体的な関係にある）。そのお手紙は今もロビーに掲げさせてもらつてゐる。「出雲神々縁結びの宿紺家」といふ看板を掲げさせて頂いてゐるのも、出雲大社の大神様のお蔭である。

ことは二月来のコロナ禍で散々な目に遭つた。来年は国中のお宮に心おきなく人々が集へるやうになることを祈つてゐる。（十一月十五日記）
（有）こんや取締役会長